

アフリカ マンガ展

— Comics in Francophone Africa —

基本情報

期間

2023年10月26日〔木〕-2024年2月18日〔日〕

開催日数

91日

会場

京都国際マンガミュージアム 2階
ギャラリー 1・2・3

主催

京都国際マンガミュージアム/
京都精華大学国際マンガ研究センター

共催

京都新聞/
京都精華大学アフリカ・アジア
現代文化研究センター

協力

Gallimard/Z-LINK/Saturday AM

助成

日本万国博覧会記念基金

後援

外務省

空間構成

榊原充大/和田寛司

グラフィックデザイン

前田健治

テキスト執筆

清水貴夫/阿毛香絵/
Christophe Cassiau-haurie
(クリストフ・カシオ＝オーリー)/
青柳悦子/ユースギョン

英訳

Cathy Sell (キャシー・セル)/ユースギョン

仏訳

Koza Aline (コザ・アリーン)

和訳

原正人/ユースギョン

担当

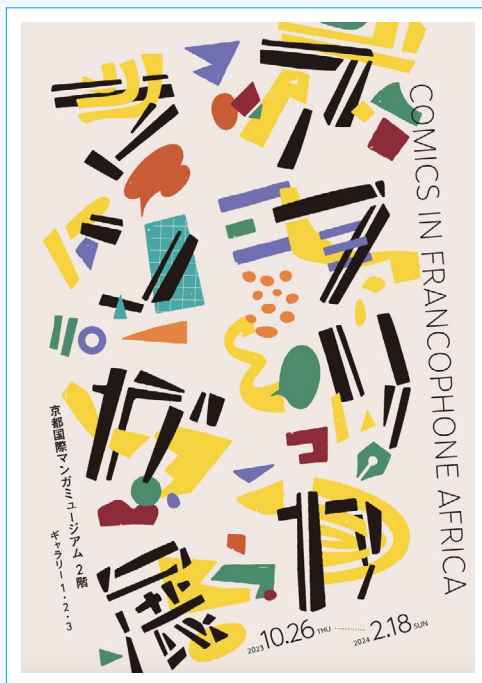
ユースギョン
(京都精華大学国際マンガ研究センター)/
大谷景子(京都国際マンガミュージアム)

監修

Christophe Cassiau-haurie
(クリストフ・カシオ＝オーリー)

実施概要 2000年代以降、活気付いてきているアフリカのマンガ文化。近年はヨーロッパを中心に、アフリカマンガに対する注目も高まっている。このような状況の中、本展は、日本ではあまり知られていないアフリカのマンガ文化を紹介するために企画された。アフリカのなかでも、ヨーロッパで最大のマンガ市場を持つフランスの影響を大きく受けた、フランス語圏アフリカ諸国のマンガに注目し、15名以上のアフリカ人作家によるマンガ作品の複製原画(デジタルプリント)、書籍、雑誌、ファンイベントの写真などを展示した。展示会場は、一部土壁が塗られ、京都で手に入った廃材による独特な形の什器とアフリカ製のカラフルな布が取り入れられるなど、独特な空間となった。●日本初のアフリカマンガ展となった本展では、フランス・ベルギーのバンド・デシネの影響を受けた作品群(第1章)と、日本のマンガのスタイルで書かれた作品(第2章)がそれぞれ紹介され、アフリカマンガの特徴と魅力、そして国境を超えていくマンガの力を感じとることができた。「アフリカマンガ展」の会場の様子が見られる動画も、京都国際マンガミュージアムのYouTubeチャンネル(<https://www.youtube.com/user/kyotomm1>)にアップロードされた。●なお、本展覧会と関連イベントは日本万国博覧会記念基金の助成を受けて開催された。[文責=ユースギョン]

フライヤー



フライヤー。(デザイン=前田健治)

動画

- 「アフリカマンガ展—Comics in Francophone Africa—」展示会場ダイジェスト
(<https://youtu.be/QJoIRQFsOb8>)



関連イベント1

シンポジウム

「マンガの中の〈アフリカ人〉」

日時

2023年11月4日〔土〕14:00-16:00

会場

京都国際マンガミュージアム 1階
多目的映像ホール

出演者

星野ルネ(マンガ家)/
Seydina Issa Sow (マンガ家)

関連イベント2

トークショー

「フランス語圏アフリカ諸国における

日本マンガの影響:

カメルーン人作家・エリヨンスの場合」

日時

2023年11月12日〔日〕14:00-16:00

会場

京都国際マンガミュージアム 1階
多目的映像ホール

出演者

Elyon's (マンガ家)

関連イベント3

企画担当者によるギャラリートーク

日時

2024年1月14日〔日〕

11:00-11:30 / 14:30-15:00

2024年1月15日〔月〕

11:00-11:30 / 14:30-15:00

関連イベント4

ワークショップ

「西アフリカの伝統泥染め『ボゴラン』体験」

日時

2024年1月27日〔土〕12:30-15:30

会場

京都国際マンガミュージアム 1階
吹抜ワークショップコーナー

講師

ちかりーぬ(西アフリカ伝統泥染作家)

関連イベント5

ワークショップ

「アフリカンパーカッション&ダンスグループ

BACHIKONDOOOOによる

ライブパフォーマンスとリズム体験」

日時

2024年2月12日〔月・祝〕13:45-15:50

会場

京都国際マンガミュージアム 1階
多目的映像ホール

講師

藤井容(プロジェンベ奏者)

展示内容

- 複製原画(デジタルプリント)計74点

出展作家

Marguerite Abouet (マルグリット・アブエ)	コートジボワール共和国
Roukiata Ouedraogo (ルーキータ・ウエドラオゴ)	ブルキナファソ
Barly Baruti (バーリー・ワルレーティ)	コンゴ民主共和国
Elyon's (エリヨンス)	カメルーン共和国
Juni Ba (ジュニバ)	セネガル共和国
Koffi Roger N'Guessan (コフィ・ロジェ・ンゲサン)	コートジボワール共和国
Martini Ngola (マルティニ・ンゴラ)	カメルーン共和国
Ultimes Griots (ウルティム・グリオ)	コートジボワール共和国
Seydina Issa Sow (セイディナ・イッサ・ソウ)	セネガル共和国
Issaka Galadima (イサカ・ガラディマ)	ニジェール共和国
Natsu (ナツ)	アルジェリア民主人民共和国
Fella Matougui (フェラ・マトウギ)	アルジェリア民主人民共和国
S. Ahmed (アーメド)	アルジェリア民主人民共和国
S. A. Rachid (ランド)	アルジェリア民主人民共和国
A. Rassim (ラッシム)	アルジェリア民主人民共和国
SID (シド)	アルジェリア民主人民共和国
星野ルネ	カメルーン共和国

- その他、雑誌、単行本、写真など

報道

- 「日本初? アフリカマンガ展 日仏2流派 輝く文化」
『京都新聞』2023年10月24日 *同記事は電子版(2023年10月25日)にも掲載
(<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/1134604>)
- 「日本のアニメから影響 アフリカ人作家の作品紹介
京都国際マンガミュージアムで『マンガ展』」
『毎日新聞』2023年11月21日
(<https://mainichi.jp/articles/20231121/ddl/k27/040/302000c>)
- 「アフリカの作家が描いた漫画 京都で企画展」
NHK関西『NEWS WEB』2023年12月5日
(<https://www3.nhk.or.jp/kansai-news/20231205/2000080180.html>)
- 「アフリカマンガの最前線! プリコラージュな表現のスピリット」
京都国際マンガミュージアム『アフリカマンガ展』レポート
『ほとんど0円大学』2023年12月5日
(https://hotozero.com/enjoyment/learning-report/kyotomm_africamanga/)
- 「日本初開催 京都国際マンガミュージアム
『アフリカマンガ展 —Comics in Francophone Africa—』レポート」
『メディア芸術カレントコンテンツ』2023年12月28日
(<https://macc.bunka.go.jp/3515/>)

会場風景。

(写真撮影=衣笠名津美)



会場風景。
(写真撮影=衣笠名津美)



展覧会に合わせて、マンガミュージアム館内に、「(アフリカ)を舞台にしたマンガ」約100作品を集めた特集棚も作られた。
(写真撮影=衣笠名津美)



展覧会に合わせて展開された特設ショップ。
(写真撮影=衣笠名津美)



▶
会場コンセプト榊原充大
(株式会社都市機能計画室)

現代のアフリカには高層ビルが立ち並ぶ都市も多く、土壁の建物や広大な自然など、ステレオタイプなイメージでは説明しきれないところもたくさん存在します。●しかし、「ブリコラージュ」という言葉で表現できる、現地にあるものでものをつくるアフリカの文化は、材を再利用しながら建物をつくってきた日本の文化にも共鳴する部分があるといえます。●今回、京都国際マンガミュージアムの「アフリカマンガ展」の会場をつくるにあたって、わたしたちはアフリカの建物やアフリカをイメージした空間を再現・模倣しようとするのではなく、その文化の根で共鳴する京都の手法でおこなうことを模索しました。●そこで会場構成の設計施工パートナーとして依頼したのが、LUNCH! ARCHITECTSです。設計から施工までの過程において、多様な技術者と「ともにつくる」を普段から実践している設計会社です。京都国際マンガミュージアムの職員のみならず、LUNCH! ARCHITECTSの和田さんとともに議論を重ねて、京都だからこそ、アフリカマンガ展だからこそこの会場づくりに取り組むことができたと考えています。この空間ごと楽しんでいただけたら幸いです。

▶
会場コンセプト和田寛司
(LUNCH! ARCHITECTS)

京都で過ごす過程で出会った人や身の回りにある廃材、環境などをブリコラージュ的に使って会場を構成することでアフリカの文化を解釈できないかと考えました。●京都市中部にある京北町では、農や茅葺きの際に共同労働することで、「結(ゆい)」のように労働を交換し合う文化が現代にも残っています。それを「てんごり」と言うらしく(一説では、「手を交換する」という意味があるそうです)、この思想を軸に、身の回りにある物だけで構成を進めていきました。●すると、改めて現代の京都における土着性を知ることになり、人間の繋がりによって作られる、根源的とも言うべく建設の本質のようなものに触れることとなりました。それはわたしたちが失いつつある「何か」な気がしてなりません。●本展の会場構成を通して感じさせられたこれらこそが、アフリカの風土の一面ではないでしょうか。そういった空気をまとった什器を添える事が自分なりの本展へのリスペクトであると信じ、共同労働、物々交換、廃材、友人、などの身の回りの様々を散りばめて作った物。これを、「てんごりブリコラージュ什器」と名付け製作に励みました。